

クローズテストを利用した授業実践 －英語学力の中核形成をめざして－

広島大学教育学部附属中・高等学校 伊 東 治 己

1. はじめに(クローズテストとは何か)

クローズテスト (cloze test, 以下 CT と略す) とは, ごく簡単に言えば, 一種の穴埋めテストであり, 穴のあけ方が規則的 (等間隔) なのが, その大きな特徴である。CT ののはじまりは, W.L.Taylor (1953) が英語の散文の readability (読み易さ) を測る手段として, 'cloze procedure' というもの考察したことに求められている (⑧ P. 183)。現在では, 英語を母国語としない人々の英語力を総合的に判断する手段として, アメリカやイギリスの英語教育関係者の注目を集めている。この方面の研究では, J.W. Oller, Jr. が有名である。CT の理論的根拠は, ゲシュタルト心理学でいう 'closure' の概念に求められる。これは, パターンの中にギャップが生じた場合, それを埋めようとする人間本来の心理的傾向を指している (⑧ P. 183)。CT において空白を埋めていくためには, 被験者は与えられた不完全な情報を頼りに, 文の構造について仮説を立て, 空白部に適当な単語を予想する。次に, 後続の情報と照合して, この予想の妥当性を検証する。もし, 間違っていれば, 元に戻って仮説を立て直す。自分の予想が正しければ, 被験者は次に進む。Oller (⑨ P. 114) は, このプロセスを分析 (analysis) と総合 (synthesis) の繰り返しとしてとらえ, 終局的には, そこに被験者の underlying competence が発現されていると考える。CT が測ろうとするものは, まさに, この被験者のもつ underlying competence であり, Oller はそれを EXPECTANCY GRAMMAR (以下 EG と略す) と呼んでいる。これは, 'expectancy for successive elements' あるいは 'the ability to anticipate elements in sequence' とも呼ばれる。Oller (⑩ pp. 443 - 452) によれば, EG は言語使用における 'key ingredient' であり, 'the foundation of all language skills' である。つまり, 英語学力の中核として位置づけられている。

2. クローズテスト (CT) 利用の動機

A. Oller の EXPECTANCY GRAMMAR (EG) の影響

EG を英語学力の中核としてとらえる Oller の理論は, 英語の基礎学力を考えるにあたって, 非常に示唆的である。ここでは, 中学生に期待される基礎学力を英語の構造の直観的理解に求める。この「構造の直観的理解」とは, 英語の構造についての文法規則を覚えることではなく, 英語の文を構成している各要素の基本的なつながりや, 相互の有機的な関連, および, 文全体の中での各要素の位置づけを internalize (内化) することを意味している。表現がぎこちないが, 要するに, 生きた英語のことばの流れを感覚的に掴むということである。ここでは, この力を, Oller の EG の必要条件として把握する。ところで, Oller たちは CT によって被験者がどの程度

EGを持ちあわせているかを調べ、それによって被験者の overall proficiency を測定しようと試みているが、ここでは逆に CT によって構造の直観的理解を強化し、さらに、英語学力の中核としての EG を中学生の中に形成しようと試みた。要するに、CT を、EG を測定するための testing device としてではなく、むしろ、EG を養成するための teaching device として、利用した。

B 形成的評価の影響

Bloom たち (⑤, P. 162) は、形成的評価を「カリキュラム作成、教授、学習の3つの過程の、あらゆる改善のために用いられる組織的な評価である」と規定している。換言すれば、価値判断のための評価ではなく、あくまでその結果を教授、学習活動に還元するための評価である。CT の利用にあたって、それを単なるランク付けのための評価手段に止めないで、それ自体が日々の学習を強化するための、全く新しい学習活動になるように配慮した。内容的にはずいぶん違うであろうが、理念的には形成的評価に通ずるところがあると思われる。むしろ、テストに学習機能をもたせるという意味において、McDonough (⑥) によって紹介されている 'mathemagenic activities' (test-like student activities that give rise to learning) という概念により近いかもしれない。テストが学習を強化することを示した Schulz (⑩) の実験も考慮に入れば、この考え方は注目し得る。

3. クローズテスト (CT) 利用の実際

- (1) 対象ならびに実施期間：広島大学教育学部附属中学校3年生40名を対象に、昭和52年4月より開始し、現在、進行中である。
- (2) 授業計画の中での位置づけ：使用教科書は NEW HORIZON English Course Book 3 である。毎日の授業の基本的性格については、comprehension-oriented approach を志向しており、英語の構造理解と各課の内容理解に重点を置いている。4技能に関して言えば、listening comprehension (聴解) と reading comprehension (読解) を強調している。CT は、各課の指導が一応終了した時点で、各課の総まとめを兼ねて実施している。
- (3) 問題作成：本来の CT においては、必ず未習の英文が問題として使用されるが、この実践においては、各課の総まとめを兼ねて、既習の本文全体を問題として使用している。具体的作業としては、まず、全く機械的に4~6語おきに空白を設定する。次に、一枚の用紙に問題をタイプする。その際、空白は一定の長さに保つ。タイプし終われば、人数分だけ問題用紙を印刷する。さらに、実施にあたって aural 形式、つまり、テープの音を聴きながら空白を埋めていく形式を採用しているため、事前に、問題用紙の印刷と同時に、教科書付随のテープから繰り返し練習の部分を各パートから抜き出し、ひとつのカセットテープにまとめて録音しておく。
- (4) 実施方法：まず、問題用紙を配布する。生徒には、裏がえしのままにしておくように注意する。テープの音が聞こえてくると「開始」であり、テープが終わると「終了」である。テープには one sentence (時に clause) ごとにポーズがあるので、生徒にはその間を利用して問題用紙の空白を埋めていくように指示しておく。所要時間は10~15分程度である。

- (5) 採点ならびに事後指導：CTの採点法としては、正解をひとつしか認めない方法と文脈に適合するすべての答えを正解とする方法の2つがあるが、この場合、本文をテープで聞かせるので、当然、正解はひとつであり、採点が容易である。些細なスペリングミスは見逃している。空白の数(45~55程度)に関係なく、50点満点で、ひとつ間違うごとに1点ずつ減じていく。テストを返した後で、間違ったところを直し、レポート用紙にまとめて提出させる。これは、自分の誤りを自覚させるためでもあり、また、生徒の弱点を知る上での研究資料にもなっている。さらに、テストの結果が悪い生徒は、再度受験させる。
- (6) 利用形態のバリエーション：純粹に筆記テストの形式で実施する方法とか、まず本文全体をポーズなしで聞かせた後空白を埋めさせていく方法、あるいは、その逆の方法などが考えられる。

4. この利用法の特徴

A 評価的側面

- (1) テストの作成・実施・採点が簡単である：利用の実際のところで述べたように、テストの作成・実施・採点はすべて機械的に、かつ、比較的短時間に行われる。
- (2) 英語の総合的な知識を評価する：生徒は、耳と目と手を、ほとんど同時に、しかも、敏捷に働かして、解答しなくてはならない。また、いわゆる integrative test としての性格を有しており、発音、文法、語彙など、言語のいくつかの面の知識を同時に評価する。さらに、EG、つまり、文の各要素の相互的な関連をどの程度理解しているかを評価する。たとえば、次のような文の場合、文全体のパターンを認知することが、空白に適語を入れるための有力な条件となっている。

People () visited Africa were always interested () African art.
The palaces () lived in only during their () did not have to be () strong.

- (3) 各課の内容の理解度をはかる：聴解においても、読解においても、教材への familiarity が重要な要因となっている。内容を十分に理解していれば、そこに予想が生まれる。つまり、空白部を予想しながらテープの音を聞くことになり、それだけ、正答率が高くなる。実際のところ、内容をよく理解している生徒は、テープの音に先行して空白を埋めており、正答率も高い。

B 訓練的側面

- (1) スピードと集中力の養成：羽鳥氏(③)は英語の学力を $(\text{文法力} \times \text{語彙力}) + \alpha$ \times スピード (α = 文才、常識または経験) のような一般式で表わし、スピードを英語学力のひとつの要因としてとらえておられる。本テストにおいては、生徒は文字とテープの音を手がかりとして、すばやく空白部に適語を予想し、テープのポーズを利用して敏速に、かつ、丁寧に書き込んでいかななくてはならない。単純計算でいくと、約5秒にひとつの空白を処理しなくてはならない。さらに、普通の筆記テストとちがって、逆戻りは許されない。全神経を集中して、問題用紙に目を走らせ、かつ、テープの音に耳を傾け、野球のバットならぬ鉛筆を

立てて構えなければならない。生徒の様子を観察していると気魄が伝わってくる。

(2) 聴解力の訓練：聴解のプロセスと CT のプロセスは心理的なレベルにおいてかなり類似しており、両者はその基本的な strategies (方略) を共有している。つまり、聴解においても分析と総合の繰り返しというプロセスがとられ、予想力が重要な働きをしている。特に、本テストは aural で実施されるので、聴解とのつながりは一層強い。より具体的なレベルにおいては、まず、文字と音声との連合が強化される。中でも、日本人の弱点とされる弱形で発音される機能語を聴き取る力を強化する。また、聴解における重要な因子とみられる memory span や retention の訓練にもなる。

(3) 読解力 (特に速読力) の訓練： Goodman (②, P. 136) は、読解と聴解の両方にかかわる receptive language process を、sampling, predicting, testing, confirming のサイクルとしてとらえている。すなわち、読解も聴解もその基本的なプロセスは同じであり、その点を考慮すれば、CT と読解の関係は、CT と聴解の関係に劣らず、密接であると言える。特に、本テストにおいては、準読解の作業を敏速に、しかも、連続的に行わなければならない。これは、直読直解につながり、ひいては、速読力の養成につながる。

(4) EG の訓練：すでに述べたように、毎日の授業では、生きた英語の流れの中で英文を理解する力を真の理解力として把握し、その養成に特別な努力を払っている。つまり、一度じっくり時間をかけ、板書事項なども参考にしながら理解したことを、さらに、音声を媒介とする場合には聞いてすぐに内容が理解できるレベル、また、文字を媒介とする場合には英文にそって目を絶えず左から右に走らせながら瞬間的に内容が理解できるレベル、にまで生徒を導いていくように努力している。この両者の技能に共通することは、英語をそれ固有の構造に即して理解する、つまり、英語を英語として理解するということである。ここから予想力が生まれてくるのであり、そこに英語学力の中核としての EG が形成されていくのである。

Oller (⑩, P. 450) はこの予想力を培うことこそ、語学教育の中心的課題であると主張している。全く同感である。

C 参考統計的資料

(1) 第 1 回～ 9 回までの平均点と標準偏差

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	7
平均点	43.03	38.60	41.30	45.45	41.80	40.98	44.00	45.83	45.62	40.93
標準偏差	7.41	9.67	8.91	5.85	6.93	8.47	7.47	5.34	5.97	5.76
空白の間隔	6 語おき	6	6	5	5	5	5	5	5	5

高三 28 名

(2) 相 関 表

	項 目	相 関 係 数	
1	クローズテストと1学期の成績	$r = +.87$	$P < .01$
2	クローズテストと実力テスト	$r = +.80$	$P < .01$
3	クローズテストと書き取りテスト	$r = +.74$	$P < .01$
4	クローズテストと中間テスト中のクローズテスト	$r = +.77$	$P < .01$
5	第1回目のクローズテストと1学期の成績	$r = +.65$	$P < .01$

(付 記)

第4回目の成績が特によいのは、丁度中間テストの時期と重なったためである。

回数が進むにつれて、成績が向上する傾向が見られる。

中間テスト中のCTとは、完全な筆記テスト方式である。

第1回目のCTの結果によって、生徒の英語力をおおまかにつかむことができる。

(参 考 引 用 文 献)

1. Aitken, K.G. (1977) 'Using cloze procedures as an overall language proficiency test,' *TESOL Q.* 11, 1, 59-67.
2. Goodman, K.S. (1971) 'Psycholinguistic universals in the reading process,' in P. Pimsleur & T. Quinn (eds.), *The Psychology of Second Language Learning*, Cambridge University Press, 1971, 135-142.
3. 羽鳥博愛. (1976)「英語の学力とは何か」中島文雄(監修)『新英語教育論』(講座・新しい英語教育1)大修館 pp. 134-149.
4. 比嘉正範. (1973)「英語の学力論」『英語教育・創刊25周年記念増刊号』(大修館)
5. 梶田一他(訳). (1973)『教育評価法ハンドブック—教科学習の形成的評価と総合的评价』第一法規
6. McDonough, S.H. (1976-1977) 'Listening comprehension: the effect of test questions on delayed recognition of content and expressions,' *Audio-Visual Language Journal*, 14, 3, 147-153.
7. 大久保忠利. (1976)「英語科教育改善への建設的私案—真のcompetenceは語順のキリカエに懸る」『英語教育』(大修館)1976年4月号
8. Oller, J.W., Jr. and C.A. Conrad (1971) 'The cloze technique and ESL Proficiency,' *Language Learning*, 21, 2, 183-196.
9. Oller, J.W., Jr. (1973) 'Cloze tests of second language proficiency and what they measure,' *Language Learning*, 23, 1, 105-118.
10. Oller, J.W., Jr. (1974) 'Expectancy for successive elements: key ingredient to language use,' *Foreign Language Annals*, 7, 4, 443-452.
11. 大友賢二. (1977)「テストの評価と問題点」『英語教育・創刊25周年記念増刊号』(大修館)
12. 三枝幸夫. (1975)「新しい英語教育—comprehensionの能力を養うには」『現代英語教育』(研究社)1975年6月号.
13. Schulz, R.A. (1977) 'Discrete-point versus simulated communication testing in foreign languages,' *Modern Language Journal*, 61, 3, 94-101.
14. Spolsky, B. (1971) 'Reduced redundancy as a language testing tool,' in G.E. Perren & J.L.M. Trim (eds.), *Applications of Linguistics*, Cambridge University Press, 1971, 383-390.